

昭和 30 年 (1~12 月) 鉱工業生産概況

通産省発表 (12 月 26 日) によると、総合生産指数は 201.8 (昭和 25 年基準) と前年 185.5 を 8.8% 上回る高水準 (12 月水準は 11 月の横ばいとして推定) を示した。この上昇率は戦前比較的正常だった昭和 5-14 年の 10 ヶ年平均生長率 10.2% に近いもので、同省ではわが国経済が戦後 10 年でやつと正常化の軌道に戻つたものと強調しているが、この生産増の主因としては、(1) 消費財を中心とした内需が予想以上にのびた。(2) 29 年下期から始まつた輸出の好調がついた。通関実績は 29 年の 16 億 3000 万ドルに対し 30 年は 19 億 5000 万ドルと 2 割増に達しているが、間接的効果も数えると輸出好調は生産増加要因の約半分を占めている、などの諸点を指摘している。これを業種別に年間平均生産指数でみると前年より減産しているものは生産抑制をかけた石炭 (0.8% 減) および投資需要の低調を反映している機械 (6.5% 減) だけでその他は軒なみ大幅な増産となつて

年間平均生産指数の比較

Table with 4 columns: Industry, 30年, 29年, 対比. Rows include 鉱工業, 製造成業, 鉄, 非鉄金属, 機械, 繊維, 紙・パルプ, 化学製品, 石油・石炭製品, 窯業・土石製品, ゴム製品, 革および同製品, 日用品.

(読売新聞, 昭 30. 12. 27)

(Z. K)

海外

世界原子力発電計画 ソ連、米国、英国の原子力発電計画の要領は次の様である。

ソ連: Capacity 50,000~100,000 kW の各種の型の reactor を使用するプラントを計画しており、100,000 kW のプラント 1 基建設中、尙 1954 年以来 5,000 W のプラント運転中である。

米国: 5 ヶ年計画で 100 万 kW のプラントを 1960 年までに建設予定で、投下資本 250 百万ドル。1975~80 年までに 100 万 kW にする予定。5 種のタイプの reactor について研究中。最初の大規模の reactor は 1957 年に Shipping port に出来上る見込みである。

英国: 10 ヶ年計画で実施中であり、最初の原子力プラントは 1956 年に 50,000 kW のものが出来、12 の発電所、capacity 100 万 kW は 1965 年までに運転に入る

予定である。

原子力発電による電力費について各国の推定は、印度の H.J. Bhabha 氏によると、50,000 kW のプラントで 1 kWh 当り 0.5 annas (6.6 mills)。カナダの J. Davis 氏によると、100,000 kW のプラントで kWh 当り 6.0 mills。ソ連の D.V. Blokhintev 氏によると、運転中の火力発電の場合と大差なく、計画中の大プラントでは kWh 当り 10~20 kopeks (2.5~5.0 cents) となる。米国の W.H. Zinn 氏によると、550,000 ドルの 2,000 kW プラントの運転より kW 当り 30~34.6 mills。また J.A. Lane 氏によると 10~20 年後には kWh 当り 4~7 mills となる。英国の J.A. Jukes 氏によると、150,000 kW のプラントで kWh 当り 5~7 mills となる。

また、発電所建設の投下資本については、英国 S.W. Joslin 氏によると、設備能力 kW 当り 336 ドル或いは燃料を含めて kW 当り 420 ドル。150,000 kW プラントの全経費 50 百万ドル、diffusion plant に対しては 56~84 百万ドル。米国 W.K. Davis 氏によると reactor に対して設備能力 kW 当り 200~250 ドル。全系に対し kW 当り 350 ドル。diffusion plant に対し kW 当り 40~80 ドル。印度 H.J. Bhabha 氏によると、100,000 kW のプラントの場合 2 億ルーピー (42 百万ドル) と推定される。 [News, 3960 (1955)]

米国最近の塩素工業事情 本年度は労働争議があつたらしいが塩素の生産には著しい影響は無かつた模様で、本年度前半期における塩素生産量は 1,585,000 t に上り、本年全期の生産予想は 300 万 t を突破するであろうと云うことである。塩素生産が 100 万 t を超えたのが 1946 年、200 万 t の線に達したのは 1950 年で、以来逐年増産し、54 年度は約 290 万 t で、本年始めて 300 万 t の線を超えることになる。過去 30 年間に塩素の増産割合は年約 12% で、これに対し全化学工業は 10% である。需要は現在非常に高い水準にある由で、塩素処理および各種の塩素化合物の製造用として塩素の用途は着々と増加を示している。本年度における主要消費部門別の内訳は、パルプおよび紙 15%、Ethylene および propylene oxide 並びに glycol 11%、Chlorinated benzene 7%、Carbon tetrachloride 6%、Vinyl chloride 6%、Trichloroethylene 6%、Tetraethyllead fluid 5%、Perchloroethylene 4%、Water & Sewage 処理 3%、Synthetic glycerol 3%、計 66%、となつている。新設、増設も現在進んでいて、主なるものは、Solvey Process が Brunswick に新設塩素 100 t/日、苛性ソーダ 125 t/日、56 年末完成予定、Diamond alkali が Muscle Shoals に増設 200 t/日、General Aniline & Film が Linden に 50 t/日、新設等がある。経済的の塩素工場の

(36 頁へつづく)

記事

空気湿電池部会 (第 29 回) 9 月 22 日 (木) 午後 1 時半 日本電池本社にて開催、岡田 (司会) 佐々木 (代) 高橋、石田、仙石他 1 名、上池 (代) 成子、三宅他 1 名、西 (代) 上田、田村、日本電池 (牧野)、松下電器 (小池) 各委員出席 1. 牧野委員は炭素陽極の放電率としめり、陽極組成としめりの関係につき実験結果報告 2. 尙パルスポーライザーによる陽極の活性度の判定結果を紹介し、実際の電池の放電結果を比較した。3. 成子氏は塩化アンモニウムを附活剤とした活性炭の焼成温度と過酸化水素分解能との関係につき報告した。

一次電池技術委員会 (第 42 回) 10 月 27 日 (木) 午後 1 時半 中央電気クラブにて開催、佐々木 (司会) 他 1 名、石田、渡辺 (東大)、三宅他 2 名、西 (代) 上田、川崎他 1 名、田村、日本積層 (佐々木他 1 名)、日東電気 (福原他 2 名)、東洋乾電池 (緑川)、東京電気化学 (高橋他 2 名)、日本レオバツク (篠原他 1 名)、神田乾電池 (広井) 高砂工業 (奥野)、松下電器 (福田他 2 名)、三洋電機 (柿山他 1 名)、三井金属 (久村)、日本乾電池工業会 (曲淵) 各委員出席 1. 高橋委員 (代) 村木氏は二酸化マンガンの pH 測定法について振盪時間、温度、表面活性剤添加、試料と振盪度の容量比等による pH の変化、及び単一振盪法と等酸点法とを比較した結果を報告した。2. 佐々木委員 (代) 青木氏 (講演) は塩化アンモニウム-塩化亜鉛-水素について組成による水蒸気圧及び比容の変化を測定した結果を報告した。3. 渡辺氏 (東大) は我国のマンガン鉱石の産額、マンガン鉱石の鉱物学的分類、俗名、我国のマンガン鉱床及びその成因等につき講演を行つた。

中部支部 浜松地方大会 9 月 29 日 (木)、30 日の両日浜松市において開催、29 日は同市公会堂にて午前中研究発表 24 件を 2 会場に分けて行い午後は大ホールにて次の特別講演が行つた。1. 生化学における最近の問題について (名大 江上不二夫)、2. 繊維工業と化学 (東大祖父江 寛)、3. 電源開発と工業対策 (野口研工藤宏規)、終つて原子力映画を見た。尙有志は静大電子工学研 (テレビ研究) を見学し 6 時より懇親会を開催した。翌 30 日は第 1 班本田技研工業、磐城セメント、第 2 班日本型製、東京電気化学驚津工場を夫々見学した。尙本大会は日本化学会東海支部との共催で行つた。

中部支部北陸大会 10 月 24 日 (月)~26 日 3 日間金沢、富山、黒部において開催、24 日は 9 時半より金沢大学理学部講堂において学術講演 17 件、午後 3 時より特別講演として 1. 原子力の平和利用について (工業技術院原子力課長 堀 純郎) 2. 肥料工業と原子力 (日産化学富山工場長 日高 毅) があり、終つて原子力映

画を見た。来聴者 400 名に上り盛会を極めた。懇親会は午後 6 時半よりつばきホテルにて開催、出席者 40 名、本部より会長代理として出席の安西正夫氏、青野武雄氏を始め中部支部長代理荒木鶴雄氏、大会委員長横山盛彰氏、副委員長の北陸電力竹村重武氏等のテーブルスピーチがあり、又金沢美人の接待に古都情緒を満喫、和やかに終つた。翌 25 日は金沢 8 時 50 分にて富山駅にて 10 時 30 分集合、見学参加者 55 名は観光バスにより 11 時日産化学富山工場に到着した。先ずスライドによつて工場の概要の説明を聞き、現場見学の後昼食の接待を受けた。次に 14 時より異国人組パルプ富山工場を見学、15 時より昭電富山工場と多忙な工場見学を終え、富山へ帰着したのは 16 時 30 分、黒部発電所の見学参加者は富山発 16 時 50 分にて宇奈月駅 18 時 07 分着、旅館河内屋に宿泊した総勢 17 名。26 日は雨天について発電所見学。関西電力の特別な御案内で黒部軌道の電車に乗り途中足下にて黒部峡谷を眺めながら樺平発電所に到着見学の後、帰途は幸に雨も上り、絶好の紅葉美に包まれた猿飛、鐘釣の風光を賞でつ、16 時宇奈月に帰着解散した。本大会開催に当つては北陸地方の各会社より多大の御援助をいただいた事を厚く御礼申し上げます。

秋季大講演会 10 月 31 日 (月) 東京理科大学深沢校舎において開催、午前中 2 会場にて研究発表 21 件を、午後 1 会場にて 9 件を行つた。当日の司会としては小島武、村川亨男、平田明徳、坂井 渡、加藤二郎、仁木栄次、田川 博、吉田 忠、岡 俊平、岡本 剛、田島榮の諸氏がその労をとられた。最後に特別講演は野村会長司会の下に「ノールウエーとその電気化学工業」と題し亀山直人氏の興味深いお話に同時の過ぎるのも忘れ、質問応答も尽きなかつた。閉会午後 5 時。

腐蝕・防蝕討論会 11 月 1 日 (火)、2 日 (水) 東大工学部 2 号館大講堂にて開催、第 1 日は講演 15 件、第 2 日は 11 件を a. 電気化学理論特に電極反応理論による腐蝕反応の検討 b. 応力腐蝕、電気腐蝕防蝕塗料に関する討論 c. 凝結反応、防蝕剤 d. 総括討論の部門に分けて行い、第 1 日午後 3 時半より特別講演 1. 腐蝕理論の進歩 (岡本 剛) 2. 化学工業材料と腐蝕 (野野 佐一) あり、終つて学士会館にて懇親会を催した。尙今回は日本化学会との共催とした。

関東支部見学会 11 月 2 日 (水) 次の工場見学を行つた。第 1 班午後 1 時より日本石油精製横浜製油所、キリンビール横浜工場を参加者 30 名が見学、第 2 班午前 10 時平塚駅に集合、パイロット万年筆平塚工場を見学し、昼食の接待を受けた後横浜ゴム平塚工場を見学し参加者 35 名、尙面工場よりバスの御提供を受けた。